

殘花聚園 (八)

(日本幼児教育史資料)

東京女子高等師範學校教授

石川 謙

六、福富草子(一)

遠い昔に於いて、子供を如何にみてゐたか、如何に取扱つてゐたかを調べる爲の一つの資料として、子供の讀物、子供に讀み聞かせる爲のお話を調べる事は、意味なきわざではない。そこで今度はお伽草子的一篇『福富草子』を紹介してみよう。お伽草子はいふまでもなく、室町時代中期から、徳川初期にかけて發達した獨特の文學である。之を作つた動機も、之を讀んだ者も、さにも恐らく「子供」の爲ではなかつたであらう。然し尠くも近世期に入るに、お伽草子が童話又は寓話として、幼い子供に讀み聞かせ話し聞かせたものであつた事は疑はれない。つまり子供の精神上の糧として、非常に大きな役立ちをしたものである。『福富草子』は後世段々に姿を變へ、筋を改めて、今日の小學讀本に見えてゐる『花咲爺』になつたものである。

「人は身に應ぜぬ果報を羨むまじき事になん侍る。昔福富の織部おひべにて、長者一人侍りけり。如何なる過去の宿縁にや、身に生れ付きたる藝一つ侍ひけるが、習はざるに奇特を現し、測らざるに名を發して、世の人、神の如くにぞ思ひける。その藝あさましく藝ければ、上中下の人までもよく聞き知りて笑を催す事なりければ、自らおのづか公おほやけかた方にも聞召し、もて興きようじ在おほしませしける事斜めならず。然れば富めるが上に富み、樂しきが上に樂しみて、棟に棟を争ひ、藏に藏を建て、五いっ穀たなつもの物耕さずして、庭に充ちくたり」。

「人は身に應ぜぬ果報を羨むまじき事になん侍る。」といふ教訓の一句が『福富草子』一篇の眼目である。之を最初に掲げた所からみても、必しも子供の讀物として作られたの

でないかもしれぬ。恐らく、幸福の上にも幸福を望む青年女子への教訓を、直接の目的としたものであらう。それにしても、分を超へて、尊い地位富める地位を望む者の出て来た戦國時代の世相を背景とした、教訓でもあり、物語でもあるミ考へられる。福富の織部は、不思議な才能に恵まれた宿命的な幸福者であるが、この物語では彼がまだ善人であるといふ色彩は殆んど全く見えてゐない。さうからか言へば、彼も亦、いんごうなそして幸せな老人に過ぎなかつたやうである。

二

「それが鄰にほくせうの藤太まで、いさ貧しき者侍り。これは織部に引き代へて、朝夕の煙も竈に絶え、ミツの路草茂りつゝ、築地にあらぬ柴垣や、幔幕ならぬ簾垂れに、夜寒の床を明しかねつゝ、軒も垣をも、この爲に毀ら取りて、餘り寒さの風を入れける。夏はあさましき麻の衣古びて、破れ團扇にて蚊を拂ひ、軒の夕顔の華やかなるを慰めにて、明し暮すめる。幼かりしより契りし人あり、藤太には十餘の姉にや侍りつらんかし。丈立すくよかに、顔つき荒まじく、口廣ければ、人、鬼姥ミぞ申しける。鬼姥或日夫のほくせうに向ひて申しけるは、士農

工商の遊民は、一つ故づける藝の侍りてこそ、名を四方に耀かし、世渡るものにて候へ。あなあさまし、其許は如何なる昔の戒行の拙き、高身になす能の在せぬ事よ。いミ口惜しきも口惜しや。打讀み走り書き、吹き囃し給ふ事こそならずとも、あの鄰の福富が一藝ばかりの事は、習はば何かミ習はざらん。然らば彼處に行きて、如何にも打歎きて、心を盡し師匠ミ仰ぎ、弟子ミもなり給ひて習へよ。神變ある世ならば、あれ程にこそ在せずとも、世渡るばかりの方便、なごかならざるべき。勝れて興に物し給はば、鄰の寶は此方に充ち侍るべけれ。假令生れ付きたりいふごも、なさざる藝の長じ侍るはあらし。玉は研くに光あり、兎にも角にも習ひ給へ。それを承引き給はずば、御名残は惜しく候へごも、姥には御暇出されば、顔の艶やかなる程に、如何なる縁も定め侍らん」ミ急かする。ほくせう理に折れて、鄰に行き懇勉に畏まり、云々の事ミ言ふ。福富出で合ひて、「ようぞ宣ふものかな。我等も其許の朝夕の友なり。侍らまじかりしかぎ、道は行いて教ふる事なければ、下り立ちて勧め參らせずして、斯う月日過ぎし」なごいミ情々しう言添へ懇に持囃すべし。ほくせう畏り、「扱もく有り難の

御好にぞものし給へ。日頃月頃鬼姥が責め侍りつれど、斯かる大事の御能を左右なつた他家には傳へ給はじき、推量り思ひ侍りしかば、鬼姥が諫めをも用ゐずして、過ぎこし年月の悔しさよ。斯う憐み申しけるを、姥に語り喜ばせ侍らん」を、手を束ねて居る。織部の心の中には、今更追従やこ、憎きものから、可笑しさ念じつゝ、「抑もこの一藝は、大事の藝の侍りて、服し、扱勤むる事に侍り。これが家の祕密なり。あな畏、人に語り給ふな」さて、何かあらん古りたる巻物取出で、薬のちやうさ様を細々語る。ほくせう、「さも侍らは、さてもの御好にその御薬、先づ一度の藝勤むる程賜はれよ。鬼姥が餘りに、せはしく申し侍るも煩ければ、近き程に一度振り出で先づ手柄を仕う奉り侍るべし」を頻りに侘びる。福富然らばさて内に入りつゝ、黒く丸めたる藝三つ取り出で、「これ構へて、空腹にすかせ給ふな。少しお腹をつくろひて、その藝をなさんと思ふ二時許り此方に、鹽湯ぬるぬるとして用ゐる給へ。必ず不思議侍るべし。若し遅くとも、さのみ苛ら給ふな。餘りに藝の遅なはり侍らば、鹽に水汲み入れて髯所を浸し、息を吹き給へ。止めたくば、息を呑み給へ」を教ふ。ほくせう喜びて、彼の薬を額に捧

げ、暇乞して歸る。鬼姥侍ちかねて、「如何に、習ひ給へりや。教へ給へりや」を言ふ。ほくせう微笑みして、云々語りければ、姥喜ぶ事限り無し。「今日の内に、さも有るべき上つ方へ行きて、宣ふべきやうは、『福富の織部が師匠に、藤太の某、何さやうにも御好み候へ。御好みに随ひて出し侍らん』を高らかに案内し給ふべし。試みにこれにて聞きたう侍れど、僅か一粒の薬なれば惜しう侍るぞかし。早々出立ち給へ」をせがむ。

ほくせうの藤太も、彼の妻であつた鬼姥も、共に感心しない性格の持主である。福富の織部に縋つて不思議な薬を貰ひ受けて、それで一攫千金の大成金にならうを考へてゐながら、それでゐて「福富の織部の師匠、藤太の某」を宣傳めいた吹聴する等しい事は、甚だ感心の出来ない事に相違ない。其の上一刻も早く金持になりたいあせりから、落着きのない振舞をしてゐる姿は、いよく醜い。然し福富の織部が、うはべに妙薬を與へるが如く粧つて、怪しげな薬を與へて、欺むいた事等も感心出来ない仕打である。

三

「斯くて妻戸の隅の皮籠より舊りたる烏帽子、柿の帷子、絹の袴取出して、ほくせうに著せつゝ、「露も臆し給ふな。こしうし首さし仰ぎて言ひ入れ給へ」烏帽子の塵拂

ひ、鬢撫でつけ、前に立ち、後に廻りて言ふやう、「烏帽子著給ひたれば、初めて姥が親の許へ婿入し給ふやうに覺えて侍るぞや、なうく、良い殿や、こほくせうは教への儘に二粒の薬を服して、道すがら腹筋張り引きつりて神鳴の如く鳴りけるを、念じつゝ、醫所を据えて急ぐ。

鬼姥から急立てられたほくせうの藤太が、あらんかぎりの

衣裳を着飾つて、例の怪しげな薬を飲むが早いか飛び出していつた焦燥ぶりは、如何にも醜體である。彼に如何なる福の神も、味方しそうにも思へない。富乞貧乞の別々な烙印を捺された宿命的な二人が、唯欲の一方から宿命を踏みじつて金持にならうと焦る姿は、戰國亂離の世なればこそ、見る事の出来る荒んだ人の氣持であつた。

夏やすみ後

夏やすみが残して行つて呉れた雑草が園一ばいに蔓つて居る。お山の上にも、砂場のまはりにも、花壇の後ろにも、人跡まれなる大原野の眺め茫々と茂つて居る。おひしは、めひしは、あれちのぎく、おおはこ、とほしがら、のびゑ、かたばみ、むらさきかたばみ、其の間をこうるぎが飛ぶ、ばつたが飛ぶ、こゝ暫くは雑草主義遊園の理想の時。煉瓦敷の遊園にも、アスファルト敷の遊園にも、季は此の雑草を蕙まうとして居る。併し上から重たく抑へつけられ、すきまもなく敷きつめられて居るは、草は下で泣いて居るに相違ない。一と夏乾燥した日光にからく、に粗らさが設計にかゝるといふ。庭御を入れて何百圓かゝつたといふ。珍棄奇石、山のとゞすまい、泉水の眺め、ハハア結構ですと茶の十徳なんか賞鑑する様な御庭に、此の雑草がはえたらどうであらう。殿様の御聲が、りて一本あつてもならぬ。刈れ々々一日も早く刈つて仕舞へといふことになるだらう。その刈つたあとは何とする。竹垣なぞうちめぐらして、いとみやびやかに、風情おかしく打ち建てられたる立札には、墨のあと美しくも、子供禁制とか、なれたる兔に角くに子供は大喜びである。半ズボンの膝を没する雑草の間を馳け廻つて、きやつきやつと云つてはつたを追ふて居る。みづひきの赤いのをしいて来て、小さな紙きれに包んだり、あなぎりの實をむしつて葉に盛つたり、おまゝごとの御馳走はいくらでもある。お庭でも、公園でも、幼稚園でも、草は見るもの、花は眺めるもの、草と一しよに眺めて而して觸るべからずとままつて居る草が、こゝでは遠慮なくふんだんにむしつてよいのである。草と一しよになつて遊んでよいのである。當分は別に玩具も何もしらない。此の雑草こそ、自由自在の玩具である。恩物である。可愛そうな都會の子供達は、此の雑草を特別の賜物のように喜んで居る。自分達の生活に必然の世界としていくらも自然が興へて居て呉れる野も知らず、山も知らず、そこで遊んだ先祖達の幸福も知らず、たまぐの夏やすみを利用して、自然が辛じて興へて呉れた此の雑草に、渴けるものが水を得た様に喜んで居る。そして年に一度づゝの此の雑草に、眞に面白い遊園の楽しさみ享けて居る。

年にたつた一度でも、此の雑草のある幼稚園は幸な幼稚園である。一日でも多く此の雑草を刈らずに置いて下さる先生は感謝すべき先生である。

——「幼稚園雑草」より——